

葉いもち早期発見・早期防除

いもち病は一度発生すると広範囲に感染が広がり、食い止めるのが難しい病気です。近年は、箱処理剤の普及により被害は少なくなっていますが、警戒を怠らずに徹底防除をお願いします。

葉いもちの発生を確認したら直ちにブラシン剤またはノンプラス剤を散布し、お近くの営農センター、営農課へご連絡をお願いします。

いもち病防除剤

農 薬 名	倍 率	散布量(10 a)	使 用 時 期	使用回数	使 用 方 法	
ブ ラ シ ン 粉 剤 D L	－	3 ～ 4 kg	収穫 7 日前まで	2 回以内	散布 ※散粉機の開度を 一目盛程度で散布	
ノ ン プ ラ ス 粉 剤 D L						
ブ ラ シ ン フ ロ ア ブ ル	1,000倍	60～150 ℓ				均一に散布する。
ノ ン プ ラ ス フ ロ ア ブ ル						
コ ラ ト ッ プ 粒 剤 5	－	3 ～ 4 kg	葉いもちに対しては初発10日 前～初発時、穂いもちに対して は出穂30日前～5日前まで		水深最低3cm以上で散布無 人ヘリでの散布可能	
コ ラ ト ッ プ 豆 つ ぶ	－	250～375 g			水深3～5cmの湛水状態 で均一に散布する。	

中後期除草と斑点米カメムシ対策

昨年は雑草発生量が多く、今年の圃場残存種子量は多いと予想されているため、後発雑草の発生は多いと思われます。後発雑草は稲の影に隠れて大きくなるため、発見時には手遅れということもしばしば。溝切りや穂肥散布、草刈り時に合わせて圃場内部に雑草が発生していないか確認してください。

斑点米カメムシ類はノビエ等のイネ科雑草、ホタルイなどのカヤツリグサ科雑草を好むため、おびき寄せないためにも圃場内の除草の他に、農道、畦畔、休耕田などの除草を地域でまとまって行い、繁殖地を無くすことが大切です。

雑 草 が 多 い		斑点米カメムシ類が多い		
圃場内、農道、畦畔、休耕田 除草の徹底		斑点米カメムシ類 住処、繁殖地根絶		
剤系	薬 剤 名	使 用 水 量 希 釈 量	本 剤 使用回数	使 用 時 方 期 法
ヒ エ 剤	ク リ ン チ ャ ー 1 * ₁₀ 粒 剤	1 kg／10 a	2 回以内	移植後 7 日～ノビエ 4 葉期 但し、収穫30日前まで 湛水散布、又は無人ヘリコプターによる散布
		1.5kg／10 a		移植後25日～ノビエ 5 葉期 但し、収穫30日前まで 湛水散布、又は無人ヘリコプターによる散布
	ク リ ン チ ャ ー E W	100ml／10 a 25～100 ℓ	1 回	移植後20日～ノビエ 6 葉期 但し、収穫30日前まで 湛水散布又は落水散布
	ヒエクリーン 1 キロ粒剤	1 kg／10 a		移植後15日～ノビエ 4 葉期 但し、収穫45日前まで 湛水散布、又は無人ヘリコプターによる散
広 葉 剤	バ サ グ ラ ン 粒 剤	3～4 kg／10 a	1 回	移植後15日～55日 但し、収穫60日前まで 落水散布又はごく浅く湛水し散布※スポット処理可能
	バ サ グ ラ ン 液 剤	500～700ml／10 a 70～100 ℓ	2 回以内	移植後15日～55日 但し、収穫50日前まで 落水散布又はごく浅く湛水し散布※スポット処理可能 注・異常高温下での散布は避ける

水田周辺の草刈り時期

	6月		7月		8月
	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬
農道畦畔 法面休耕田等	草刈り期間		おばこ一斉草刈りデー 7/17～21 出穂10～15日前までに 草刈りを終わらせる。		カメムシ防除まで 草刈り禁止

暑 さ 対 策 の 準 備 を

長期予報によると、8月まで気温が高いと予報されているため、高温登熟の危険性が高いうえ、梅雨の降雨が十分に無い場合は用水不足の懸念もあるため、早い段階から心配への備えをしておきましょう。

ケイ酸肥料散布

溝 切 り の 実 施

生育調査・診断による
穂肥、実施の判断

畦 畔 補 修

地域内での配水協議

No.4

農業技術情報

安心のネットワーク

NOSAI

令和2年6月発行

発行：秋田おばこ農業協同組合／秋田県農業共済組合仙北支所

監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課



溝切り、中干し、生育診断 異常気象への備えを

管内では、5月24日に田植え盛期(50%)を迎えました。5月19日から5月21日にかけて低温に遭遇し、この時に植えた苗は一時的に生育が遅れましたが、5月下旬からの気温上昇に伴い生育は回復傾向にあります。6月5日現在の生育状況は活着を終え、分けつが始まってきており、葉色は少し淡めで推移しています。

向こう3か月予報(仙台管区气象台5月25日発表)では、6～8月は気温が高いと予報されているため、雑草や斑点米カメムシ類、高温登熟への備えが必要となりそうです。本号では7月中旬までの管理を特集しますので、基本的な栽培管理を再確認して、異常気象に備えた稲作を行いましょう。

6月下旬～7月中旬の栽培技術留意点

①溝 切 り の 実 施

今年の夏は暑い?!溝切り跡を活用することで効率的な水回しが可能になります。高温登熟並びに節水対策、最後まで実するための水分補給のために、令和2年稲作では溝切りは必須技術です。中干し開始に合わせて、もうひと手間をかけて良い実りと呼び込みましょう。

高 温 登 熟
節 水 対 策
実りへの水分補給

ポイント

【必須技術】
溝 切 り

②中 干 し

土中への酸素供給と有害ガス放出、秋作業への土台作りとして中干しを適切に行います。強い中干しは稲の根を切り、稲体の衰弱に繋がります。また、幼穂形成期から稲は水を必要とする時期に入るため、その前までには中干しを終了し、間断かん水に移行します。

ポイント

強い中干しはNG

幼穂形成期前には終了

③生育診断による穂肥

今年は同じ栽培条件でも、低温期に田植えをした圃場とそれ以外の圃場での生育差が予想され、圃場ごとの管理が必要です。例年以上に生育調査、観察をこまめに行い、圃場に合わせた穂肥の判断をしてください。

穂肥判断

移植日によって圃場生育差

こまめな
生育調査・圃場観察

④病 害 虫 雑 草 対 策

箱処理剤の普及と共に病害虫の発生は少なくなっていますが、一度病害虫が発生すると抑えるのに一苦労します。水回り時に圃場内に入って葉色の濃淡箇所や病害虫雑草が発生していないかを確認し、異常が見つければ早期に対策しなければなりません。

ポイント

ノビエ、ホタルイ対策

斑点米カメムシ類やや多い予想

葉色の濃い箇所を中心にいもち警戒

【訂正とお詫び】

農業技術情報No.3「とりこぼしたら中後期除草剤」に誤りがありましたので、下記のとおり訂正しお詫び申し上げます。

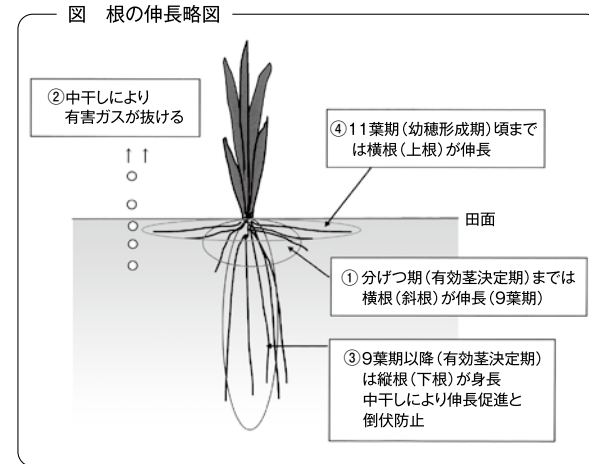
薬 剤 名	ノビエ	ホタルイ	オモダカ	コナギ	散布方法
ア ト ト リ	○ 4葉期まで	効果なし	○ 矢尻葉3葉期まで	効果なし	湛水散布

※農薬は使用前に表示ラベルを必ず確認してから使用しましょう。

適切な中干しを

有効茎決定期（6月25日頃）目標茎数の8割を確保後、1週間程度の深水管理後、落水し中干しに入ります。中干しの実施期間は7～10日程度とし、幼穂形成期前までには終了します。中干しの程度は田面に幅1～2cm程度の亀裂が入り足跡が付く程度としますが、黒ボク土や泥炭土地帯は田面の硬さを直接確認してください。また、田面が白くなったり、亀裂が大きくなったりする過度な中干しは、断根し稲体を痛める原因となるため注意が必要です。

中干し終了後は溝切り跡を活用しながら間断かん水とし、土壌を酸化的な状態に保ち根の活力を維持します。



中干しの効果

土中の有害ガスを抜く

土中に新鮮な空気を供給

根を下方に伸長

田面硬化により刈取り機械容易に

無効分げつ抑制

生殖生長への切り替え

受光体勢向上

中干し要点まとめ

中干し期間は7～10日程度

幼穂形成期前までには終了

田面に亀裂幅1～2cmでOK

黒ボク土、泥炭土は直接確認

強い中干しはNG

中干し実施の目安

6月20日頃に調査し、あきたこまち有効茎決定期の目標茎数346本／㎡の8割（277本／㎡）を確保したら深水管理を行い、中干しを行いましょう。

277本／㎡の目安	
栽植密度	株あたり茎数
70株植	13本
60株植	15本
50株植	18本

277本／㎡以上 直ちに中干しを行う。

277本／㎡確保 深水管理を行い中干しを行う。

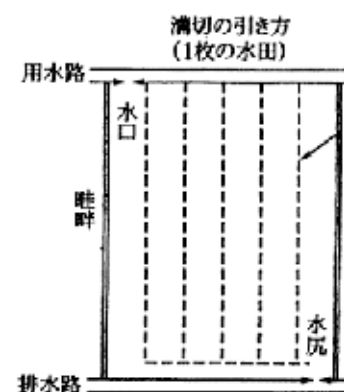
277本／㎡未満 有効茎確保後軽めの中干しを行う。

溝切りの実施

今夏は高温が予想されているうえ、用水不足も懸念されています。節水しながら効率的な水管理ができる「溝切り」は今年の稲作の必須技術です。

溝切りは、中干し開始後2～3日後頃の田面がやや軟らかい状態で行います。溝の交差部分と水尻は忘れずに必ず繋いでください。乗用型溝切り機は少し水を張った状態で行うと作業効率が上がります。

圃場整備初年度や排水不良田、高低差がある圃場では必ず溝切りを行ってください。



溝切りは排水の難度に応じて2～3m（6～12条）間隔で図のように引きます。

また溝の交差している場所と水尻は必ず繋ぎます。

交差部分は繋げる



まだ間に合うケイ酸

高温が予想されている今夏、ケイ酸は必ず補給しておきたい栄養素です。ケイ酸が十分にあることで、高温下でも呼吸・蒸散機能が維持され、稲体の夏バテを防ぎ登熟を維持してくれます。また、粳穀の結合を強くし割れ粳を防ぐことで斑点米カメムシ類による斑点米被害を抑制してくれます。ケイ酸は、高温、低温、日照不足等異常気象下での稲作に欠かせない成分です。

春先に散布していない方は早期にケイ酸を施用してください。



中間追肥一覧

肥 料 名	種 類	施肥量(kg／10a)	施用時期	施 用 効 果	
お ば こ ロ マ ン 大 地	ケ イ 酸 含 有 肥 料	20～40kg	幼穂形成期 まで	①倒伏抵抗性が高まる ②根の活力向上 ③有効茎歩合向上 ④登熟歩合向上 ⑤食味向上 ⑥病害虫被害の軽減 ⑦葉身の老化軽減 ⑧ワキの発生抑制 異常還元（ワキ）等により、分げつが遅れて いる稲や根張りの弱い稲に使用。 ①根の活力向上 ②有効茎歩合向上 ③登熟歩合向上	
け い 酸 加 り		20kg			
K S K 28		1.4kg（1本）			
P K 40 号	リ ン 酸 含 有 肥 料	20kg			
マ グ コ ー プ					

生育診断と穂肥

異常気象下でも安定的に収量を維持しながら高

品質米生産に取り組むには、稲の生育状況を把握

し圃場に合った穂肥など生育管理をすることが大

切です。幼穂形成期に生育・栄養診断を行い、診

断結果と気象予報に応じた穂肥を行いましょう。

穂肥一覧

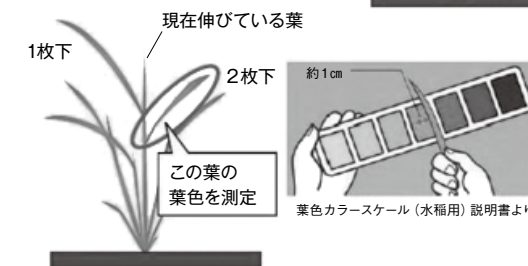
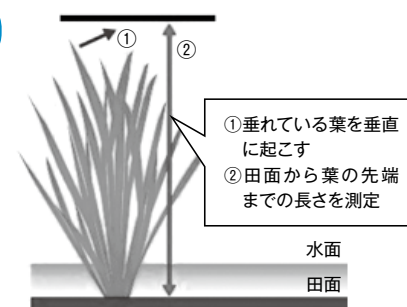
肥料名	おばこロマンみのり	おばこロマンめぐみ
施肥量(kg/10a)	7～13kg (チッソ換算:1.05～1.95kg)	
施肥時期	出穂前15日	
備考	硫安系 15-4-15 有機20%入り	塩安系 15-4-15 有機20%入り

時期別理想生育量（あきたこまち）

項目	時期	有効茎決定期	最高分げつ期	幼穂形成期	減数分裂期
		6月25日	7月5日	7月15日	7月25日
草丈(cm)		33～36	45～50	60～64	72～75
茎数(本/㎡)		314～378	440～484	443～484	420～454
葉数		8.1～8.6	9.6～10.0	10.7～11.0	12.1～12.5
葉色(SPAD値)		42～44	43～45	41～43	37～39

生育調査の方法

外周や水口、水尻、稲株が重なりあっている、又は近い箇所を除き、平均的な株を調査します。



幼穂形成期（7月15日頃）の生育診断

